

中央図書館電算化計画について

中央図書館庶務課

1. はじめに

中央図書館では、平成4年11月より5ヶ年計画で図書館システムの電算化に着手することになりました。教育・研究機関である大学の根幹を支える図書館の機能を向上させるために全学的な学術情報システムを構築し、文部省が提唱する学術ネットワークへ参画することをその目的としています。具体的には、電算機センターで使用していた IBM-4381 を図書館専用機として活用し、本学が所蔵する図書・雑誌の目録情報データベースを中核とする図書館システムを開発・運用することにより、

- ①学術情報提供機能の強化
- ②学術情報センター等を活用した図書整理業務の迅速化
- ③貸出・返却・閲覧等の図書館資料運用機能の強化
- ④図書館資料の資産管理機能の強化
- ⑤選書・発注・予算管理業務の最適化・効率化

の実現を目指すものです。

2. 総合図書館システム DOBIS/E の導入

電算機センターは現在 IBM-3090 を使用していますが、以前使用していた IBM-4381 が遊休機として残っていました。学内の新規事業委員会での協議の結果、当該機に必要な機器を付加して図書館専用機とし、図書館の電算化を推進することが正式に決定しました。

図書館専用機が IBM に決定したことにより、IBM の図書館パッケージソフトである DOBIS/E を導入することになりました。当該ソフトウェアは、西ドイツの DORTMUND

大学とベルギーの LEUVEN 大学で開発された DOBIS/LIBIS を母体として、早稲田大学で日本の図書館用に手直しされたものを IBM がパッケージ化したものです。現在31ヶ国204機関で導入実績があり（平成4年末現在）、日本においては32機関が利用しています（平成5年4月現在）。今回本学が導入したのは、早稲田大学でさらに改良を施した「WINE」(Waseda university Information Network system) というシステムで、これに対して本学独自の改良を加えていく計画にしています。

3. 学術情報センター目録システムとの接続

学術情報センターは文部省の大学共同利用機関の1つで、前身の東京大学文献情報センターを転換・拡充して昭和61年4月に発足しました。文部省が提唱する学術情報システム、すなわち、人文・社会・自然科学の全分野の学術情報を対象とし、全国の国公立大学等の参加のもとに、大学の大規模計算機センター・情報処理センター・図書館・大学共同利用機関等をコンピュータとデータ通信網で結合し、大学等の研究者が必要とする学術情報を迅速・的確に提供する全国的・総合的な情報流通システムを構築するための中枢機関として当該センターは位置づけられています。

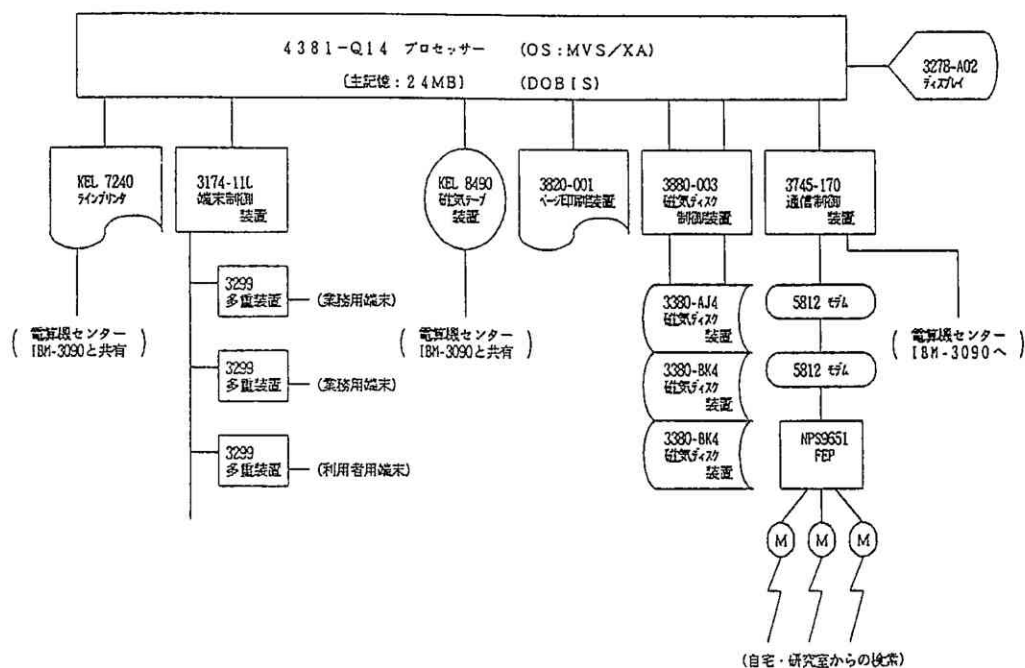
目録システムは当該センターが展開するサービスの1つで、オンライン・ネットワーク方式により全国規模の総合目録データベース（図書・学術雑誌）を形成するためのシステムです。平成5年1月現在で国立大学96・公立大学14・私立大学105を始めとする

239機関が参加しており、和図書の書誌約70万件・所蔵約550万件、洋図書の書誌約170万件・所蔵約380万件、和雑誌の書誌約7万件・所蔵約152万件、洋雑誌の書誌約11万件・所蔵約93万件的データベースに成長しています。(平成5年1月末現在)

本学では工学部(呉・東広島キャンパス)が平成3年10月に目録システムへ接続していますが、中央図書館は今年の2月に接続を果たしたばかりで、現在目録システムを活用した整理業務の改革を進めている最中です。予定では、8月末までに目録システムへ登録したデータを変換してDOBISに搭載するためのプログラム開発を完了し、今まで外注に頼っていた目録情報作成を、学術情報センターを活用した館内処理へ移行することになっています。将来的には、発注の段階から電算機で処理することを検討しており、発注・納品・整理といった一連の処理を迅速に行なえる収集・整理システムへと発展させていく計画です。

【図1】

近畿大学・図書館システム構成図



4. システム構成図

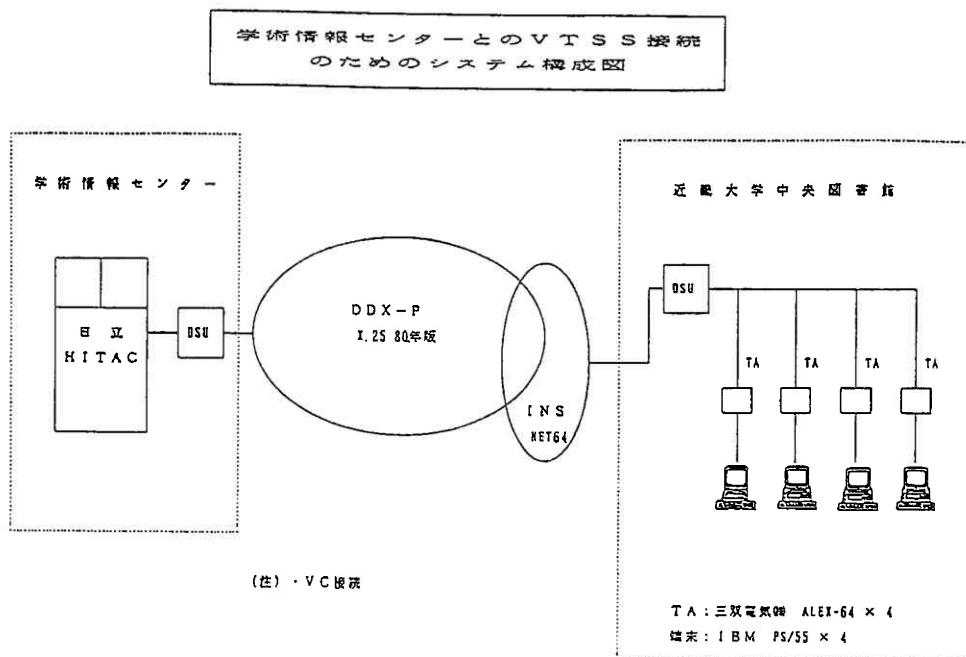
図書館専用機 IBM-4381 の機器構成および学術情報センター目録システムとの接続に係る構成図を掲げました。(図1・2を参照)

5. 目録情報検索システム(図書)

まずは第1期計画として、平成5年5月末までに、和書は1983年、洋書は1980年より国際規格に準拠して蓄積してきた図書の書誌データを変換してDOBISへ搭載し、利用者が端末から直接目録情報を検索できる目録情報検索システムを稼働させることを目標にしていましたが、6月15日にテスト版として稼働させるに至りました。テスト版で検索できる図書の目録情報と稼働時間帯は以下の通りです。

- ・和書: 1983年4月から1992年3月末までの整理済図書
 - ・洋書: 1980年4月から1991年3月末までの整理済図書
- 合 計: 約23万件

【図2】



・平 日 : 9 : 30 ~ 19 : 30

・土曜日 : 9 : 30 ~ 12 : 00

これ以外に、「J-BISC」、「BIBLIOFILE」といったCD-ROMを活用して蓄積したデータがありますが、漸次変換をしてDOBISに搭載することにしており、前述の学術情報センター目録システムのデータ変換プログラム完成と合わせて、今年度中には和書は1983年、洋書は1980年以降のすべてが検索できるようになる予定で、その時点で本番の目録情報検索システムに移行する予定です。

当面は、取敢えず図書館内に4台の利用者用端末を設置して、テスト版の目録情報検索システムをスタートさせましたが、利用者用端末は今年度に10台を追加する予定で、漸次端末台数を増やすことにしています。この図書館内の利用者用端末とは別に、自宅・研究室等から目録情報検索システムに接続することができるよう、公衆回線・学内

の内線網を活用したネットワーク・システム「CAPSULE3270」を導入することになっています。このシステムにより、手持ちのパーソナル・コンピュータにモデムを付加し、自宅からは公衆回線、研究室等からは学内の内線網を介して図書館のホスト・コンピュータに接続することができるようになります。手持ちのパーソナル・コンピュータには端末にするためのソフトウェアを搭載しなければなりませんが、以下の機種についてはソフトウェアのフリーコピー契約を結んでいますので、自宅・研究室等からの検索を希望する教職員・学生には当該ソフトウェアを無料で提供することになっています。

〈CAPSULE3270の対象となる機種〉

- ・IBM : PS55 シリーズ (DOS/V)
- ・NEC : PC-98 シリーズ
- ・東 芝 : J-3100 シリーズ

6. 将来構想

図書の目録情報検索システムが稼働した後は、雑誌の目録情報検索システムに着手することになっています。学術情報センター目録システムの中には「学術雑誌総合目録」編纂のために提出した本学所蔵のデータがあり、これを活用することになっています。雑誌のデータは図書のそれに比べ書誌が軽いため、DOBIS に搭載するよりはむしろ全文型のデータベース・システムを活用する方法を検討しており、予算等の条件がクリアできれば来年度中に稼働させたいと考えています。

貸出・返却システムは現在唯一電算化されたシステムで、パーソナル・コンピュータ 4 台をトークンリングでネットワーク化し、館員の開発したプログラムで稼働しています。トータル・システムである DOBIS の特徴の 1 つとして、目録情報検索から目的とする図書の状態（利用可能・貸出中等）が即座に判別でき、必要に応じて利用者自身が貸出中の図書に予約をかけることもできますが、この特徴を生かすため、現在稼働している貸出・返却システムを平成 6 年 4 月には全面的に DOBIS へ移行する予定にしています。

貸出・返却が自動化され、図書・雑誌の目録情報検索システムが全面的に稼働すれば、図書館の電算化は完了したように見えますが、図書館の電算化には業務システムとしての側面もあり、館内業務の最適化・効率化・定型化を実現することも必要です。そのために、以下のものを計画が完了する平成 9 年 3 月までに検討・着手することになっています。

①発注・受入サブシステム

：平成 7 年 4 月稼働

②逐次刊行物サブシステム

：平成 7 年 4 月稼働

③資産管理サブシステム

：平成 7 年 4 月稼働

④本部キャンパス外の学部とのネット

ワーク化：平成 6 年 4 月に着手

⑤未入力図書情報の遡及入力

：平成 8 年 4 月に着手

旧来からのカード目録を基盤とした図書館は大きな転換期を迎えています。大学図書館にとって図書館の電算化は最早避けて通れないものとなっており、教育・研究環境の改善のためには必須のことと認識されるに至っています。本学の電算化計画はまだその緒に着いたばかりですが、教職員をはじめ関係者各位のご理解とご協力を得て、この事業を成功させたいと考えております。

